

枕草子と漢詩文

— 国語古典と漢詩文(その三) —

中 西 清

一、まえがき

この文は、さきに記した、国語古典と漢詩文(その一)奥の細道と漢詩文(漢文教室第二十六号掲載)、同じく(その二)徒然草と漢詩文(漢文教室第二十八号掲載)に続くものである。

この論文は、国語古典の中に引用された漢詩文を調べて、国語古典と漢詩文との関係を明らかにすることを目的とした。

もとより、この仕事は、私のような浅学のよくするところではないが、一応先輩の国文学者の研究になる古典の註釈の中から、原文に関係のある引用漢詩文を拾いあげ、これをその原典に当り、引用漢詩文の一覧表を作り、次第に積み重ねて行きたいと思う。かくすることに よって、国語古典と漢詩文という比較文学の問題を検討する材料が整えられるのではないかと思う。

二、枕草子と清少納言の漢才

わが国、中古の西暦八〇〇年代から九〇〇年代頃までの間は、漢学撰取のもっとも盛んな時代で、その編著書もほとんど漢詩文集や漢文書きの史書に限られていた。しかるにこの頃から仮名が発明され、九〇〇年代頃には、自由に仮名が用いられ、竹取・伊勢等の物語、古今和歌集、土佐日記等の仮名書きの作品が現われて来た。それより一世紀を過ぎた一〇〇〇年代になると、枕草子・源氏物語等の傑作がつぎつぎに著わされ、わが国文学史の上に絢爛たる華を咲かせている。

そしてこの頃の紳士・淑女の教養としては、男は漢籍を読み、漢詩を作り、漢字を書くことを表とし、女は物語を学び、大和歌を詠み、仮名を書くことを主としていた。

しかるに清少納言は普通の型を破り、このような女性のたしなみの外に、男性の表芸とした漢籍や漢詩を学び、その鋭い機智と鋭い感覚とによって、これを近代的に再生している。枕の草子の文学作品としての価値は、多々あると思われるが、それらは専門家の研究に譲り、この小論では特に清女の漢才について検討してみたいと思う。

備考

枕草子の引用文はすべて日本古典全書の枕冊子 田中重太郎氏校註によった。註釈はその外に、全講枕草子上 池田龜鑑氏著を参考とした。

その他の参考文献は次の通りである。

1. 古代の文学 後期 日本文学講座II
2. 日本古代文学史 西郷信綱著
3. 日本の小説 日本文学講座IV
4. 枕草子評釈 金子元臣著
5. 本朝文粹註釈 上下 柿村重松著
6. 倭漢朗詠集考証 柿村重松著
7. 和漢朗詠集新釈 金子元臣、江見清風共著
8. 日本文学年表 井本農一著

9. 引用漢詩文原典については、引用漢文一覧表に記してあるからこゝには省略する。

(1) 二〇〇段

書は文集・文選・新賦・史記・五帝本紀・願文・表・博士の申文。

書は漢籍の意で、作者が親しみを持っている漢籍を、白氏文集・文選・新賦・史記、史記の中では特に五帝本紀を別記している。願文・表(天子に奉る上表文)・博士の申文(文章博士が書いた官位昇進の申請書)等は日本漢文に属するもので、後に本朝文粹に収められているものである。これによっても清女が漢籍・日本漢文に心を寄せていたことは認められる。

(以下章段の順序に記すことにする。)

(2) 七八段

頭の中將のすずろなるそら言を聞きて、……………長押の下に火近く取りよせて、さしつどひて扇をぞつく。女房「あな、うれし。とくおはせよ」など見つけていへど、すさまじきこちして、なにしにのぼりつらむとおぼゆ。炭櫃のもとにゐたれば、そこにまたあまたゐるものなどいふに、「なにがしさふらふ」といとはなやかにいふ。清「あやし。いつの間に、なにごとのあるぞ」と問はすれば、主殿司なりけり。主殿司「ただこもとに人づてならで申すべきことなむ」といへば、さし出でていふに、主殿司「これ、頭の殿の奉らせたまふ。御返事とく」といふ。

いみじくにくみたまふに、いかなる文ならむと思へど、ただいまそぎ見るべきにもあらねば、清「往ね。いまきこえむ」とて懷に引き入れて、なほ人のものいふ聞きなどするに、すなはち歸り來て、主殿司「頭中將『さらば、そのありつる御文をたまはりて來』となむおほせらる。とくとく」といふが、あやしう、いせの物語な

りやとて見れば、青き薄様にいと清げに書きたまへり。心ときめきしつるさまにもあらざりけり。

蘭省花時錦帳下

と書きて、「末はいかに、末はいかに」とあるを、いかにかはすべからむ、御前おはしまさば御覽せさすべきを、これが末を知りがほにたどたとしき眞名書きたらむもいと見苦しと思ひまはすほどのなぐ責めまどはせば、ただその奥に炭櫃に消え炭のあるして、

草の庵をたれかたづねむ

と書きつけて取らせつれど、また返りごともいはず。

みな寝て、つとめていととく局に下りたれば、源中將の聲にて、「ここに草の庵やある」と、おどろおどろしくいへば、清「あやし。などてか、人げなきものはあらむ。『玉の臺』ともとめたまはましかば、いらへてまし」といふ。

……………

この章は、一條朝において公任・俊賢・行成と共に四納言と称せられ、才学の誉の高かった藤原齊信(近衛中將となり、藏人の頭となつたので頭の中將ともいっていた)が、主殿司に手紙を持たせて、清少納言に渡し、「御返事を早く」と求めさせた。少納言はその手紙をすぐには見ず、使をかえしふところに入れて、人の話を聞いていた。すると、主殿司がたちまち引き返えして来て、「御返事を下さらねば、さつきのお手紙を返していただいてこいとおっしゃいます。早く、早く、お急ぎねがいます。」という。どうも変だ、せっかくよこした手紙をとりかへすとは、伊勢物語にあるように余程急ぎの手紙だなど思つてあけてみると、青い薄様に、きれいな文字で、「蘭省花時錦帳下」と書いて、「このあとはいかが、いかが」と記してあった。しかしこの句のあとを、いかにも知ったかぶりをして、おぼつかない漢字で書きなどしたら、ひどく見苦しいと思案するひまもなく、早

く、早くと催促するので、すぐ手紙の奥に、いろいろの中に消えた炭のあるのみつけてとり、「草の庵をたれかたづねむ」と書きつけて渡した。というのである。

蘭省花時錦帳下。廬山雨夜草庵中。

は、三、引用漢詩文一覽表のらの部にあるように、白氏文集の「廬山草堂雨夜独宿寄牛二李七庾三十二員外」という律詩の三・四句である。清少納言は、平凡に、「廬山雨夜草庵中」と書くことを避け、公任卿集に見える連歌の一句「草の庵をたれかたづねむ」という公任作（これに對して、「このへの花の都をおきながら」といふ、藏人たかただの句が附いている）をかりて、當意即妙に答えたのである。文集をよみ、多くの歌集をよんでいるものでなければ到底できない返事である。長くなるので、七八段の全文を掲げることとは避けるが、翌朝源宣方（右中将）が、「ここに、草の庵やある」と早速やってきて、昨夜の出来ごとを報告している。それによると、「清少納言の、草の庵をたれかたづねむ」の歌に、上の句をつけて返事をしよう、『源中将つけよ』と頭の中將がいうので、夜のふけるまで思案したが、つけあぐんでそのままになってしまった。そしてついにあなたの名前を『草の庵』とつけた。』というのである。又、修理の亮橘則光（清少納言の若い時の夫）が来て、同じく昨夜の出来ごとを話し、よろこびを述べている。中宮からお召しがあって、「主上までこのお話を申され、『殿上人はみな昨夜の句を、扇に書いて持っている』とのことなどを仰せられ、たいそう面目を施している。」

(3) 一〇一段

殿上より、梅のみな散りたる枝を、「これいかか」といひたるに、ただ、清「早く落ちにけり」といらへたれば、その詩を誦じて殿上人黒戸にいとおほくるたる、うへの御前にきこしめして、主上「よろしき歌など詠みて出だしたらむよりは、かかることはまさりたり

かし。よくいらへたり」とおほせられき。

これは殿上の間から、梅の花のみな散った枝を、「これはいかがですか」といってよこしたのに対し、和漢朗詠集、紀長谷雄の内宴停盃看柳色序の、「大庾嶺之梅早落。誰問粉粧」の句によって、ただ、「はやく落ちにけり」（おやもう散ってしまいましたね）と清少納言が答えたところ、その詩を口ずさんで殿上人が大勢黒戸の間にいた。主上はそれをおきになって、「通り一ぺんの歌などを詠んだのよりは、こうした機智に富んだ秀句を述べた方がはるかにすぐれている。」とおほめになった記事である。

(4) 一〇二段

二月つごもりごろ風いたう吹きて空いみじう黒きに、雪すこしうち散りたるほど、黒戸に主殿司来て、「かうてさぶらふ」といへばよりたるに、主殿司「これ、公任の宰相殿の」とであるを見れば、懷紙に

すこし春あるこここそすれ

とあるは、げにけふのけしきにいとようあひたる、これがもとはいかでかつくべからむと思ひわづらひぬ。清「たれたれか」と問へば、主殿司「それそれ」といふ。みないとはづかしきなかに、宰相の御いらへをいかでかことなしびにいひ出でむと心ひとつに苦しきを、御前に御覽せさせむとすれど、うへのおはしまして御とのごもりたり。主殿づかさは「とくとく」といふ。げにおそうさへあらむはいととりどころなければ、さはれとて、

清 空寒み花にまがへて散る雪に

と、わななくわななく書きてとらせて、いかに思ふらむ、わびし。これがことを聞かばやと思ふに、そしられたらば聞かじとおほゆるを、「俊賢の宰相など、『なお、内侍に奏してなさむ』となむさだめたまひし」とばかりぞ、左兵衛の督の、中將におはせし、語りたまひし。

当時歌学・芸道の達人とされていた藤原公任（宰相は参議の唐名、當時参議であった）から、

すこし春ある心地こそすれ

という和歌の下の句を示されたのに対し、この句が、白楽天の律詩「南秦雪」（三、引用漢詩文一覽表、すの部 参照）の四句目、「二月山寒少雪春」に基づいていることを見破って、直ちにその上の句として、同詩の第三句「三時雲冷多飛雪」を翻案して、

空寒み花にまがへて散る雪に

と書いて渡したのである。まことに和歌としても見事であり、漢詩の訳としてもすぐれたものである。後に参議源俊賢などが、「やはり内侍にしてくださいに奏請しよう」と評定をしたというのもっともである。

(5) 一三一段

頭の辨の、職にまゐりたまひて物語などしたまひしに、夜いたうふけぬ。頭辨「明日御物忌なるに、こもるべければ、丑になりなばあしかりなむ」とてまゐりたまひぬ。

つとめて、藏人所の紙屋紙ひき重ねて、頭辨「今日はのこりおはかるこちなむする。夜をとほして昔物語もきこえ明かさむとせしを、鶏の聲にもよほされてなむ」といみじう言おほく書きたまへる、いとめでたし。御返に、清「いと夜深く侍りける鳥の聲は孟嘗君のにや」ときこえたれば、たちかへり、「孟嘗君の鶏は函谷の關を開きて、三千の客わづかに去れり」とあれども、これは逢坂の關なり」とあれば、

清「夜をこめて鳥のそら音ははかるとも世にあふ坂の關はゆるさ

じ 心かしこき關守侍り」

ときこゆ。また、たちかへり、

頭「逢坂は人越えやすき關なれば鳥鳴かぬにもあけて待つとか」

とありし文どもを、はじめのは僧都の君いみじう額をさへ突きて、とりたまひてき。後後のは御前に。

さて、逢坂の歌はへされて返しもえせずなりにき。頭辨「いとわろし。さて、その文は殿上人みな見てしは」とのたまへば、清「まことにおぼしけりとこれにこそ知られぬれ。めでたきことなど人のいひ傳へぬはかひなきわざぞかし。また、見苦しきこと散るがわびしければ、御文はいみじうかくして、人につゆ見せ侍らず。御心ざしのほどをくらぶるに、ひとしくこそは」といへば、頭辨「かくものを思ひ知りていふが、なほ人には似ずおぼゆる。『思ひくまなくあしうしたり』など、例の女のやうにやいはむとこそ思ひつれ」などいひて、笑ひたまふ。清「こは、などて。よろこびをこそきこえめ」などいふ。頭辨「まろが文をかくしたまひける、また、なほあはれにうれしきことなりかし。いかに心憂くつらからまし。いまより、さを頼みきこえむ」などのたまひて、……………

この文は、史記の孟嘗君列伝（一覽表、つの部参照）の、孟嘗君が秦に使し、雞鳴をうまくまねるものの機智によって、函谷關を越えて無事に奔に帰ることが出来たという故事を織り込んで、清少納言と藤原行成（藏人の頭、権左中弁であったので頭の弁という）とが歌問答をしたものである。「夜をこめて」の歌など、この記事を離れて単独に一首の歌としてこれをみれば、それほどよくはないかも知れないが、巧みにこの故事を詠みこんで、「鳥のそら音は深夜に函谷關の役人をうまくだましたか知りませんが、この逢坂の關は、決してそううまくはいきません。あなたがいくらうまいことを仰言っても、私は絶対に間違いいたしませんよ」の意を歌っているのはなかなか面白いと思う。又行成が、清少納言の「……世に逢坂の關はゆるさじ」の歌を殿上人に披露してしまったといったのに対し、「あなたがほんとに愛して下さるのだと、これでよく分りました。すばらしいことなど、人が

言い伝えないのは、かいのないものです。けれどもわたしはまた、見苦しい歌が散らばるのはいやですから、お手紙はひめかくして、人にはちっとも見せませんでした。あなたのお志を、それとくらべれば、同じことでしょう」とやりかえしている。まことにウィットとユーモアに富んだ応対である。

(6) 一三二段

五月ばかり、月もなういと暗きに、殿上人「女房やさぶらひたまふ」と聲聲していへば、宮「出でて見よ。例ならずいふはたれそとよ」とおほせらるれば、清「こは、誰そ。いとおどろおどろしうきはやかなるは」といふ。ものはいはで、御簾をもたげてそよろとさし入る、くれ竹なりけり。清「おい、『この君』にこそ」といひわたるを聞きて、「いざいざ、これまづ殿上に行きてかたらむ」とて、式部卿の宮の源中將、六位などもなりけるは往ぬ。

頭の辨は、とまりたまへり。頭辨「あやしくても往ぬる者どもかな。御前の竹を折りて、歌よまむとしてしづるを、おなじくは、職にまゐりて、女房など呼び出できこえて」と持て來つるに、くれ竹の名をいとくいはれて往ぬるこそいとほしけれ。誰が教へを聞きて人のなべて知るべうもあらぬことをばいふぞ」などのたまへば、清「竹の名とも知らぬものを。なめしとやおぼしつらむ」といへば、頭辨「まことに、そは知らじを」などのたまふ。

まめごとなどいひあはせてゐたまへるに、殿上人「種多てこの君と称す」と誦じて、また集り來たれば、頭辨「殿上にていひ期しつる本意もなくては、など歸りたまひぬるぞとあやしうこそありつれ」とのたまへば、殿上人「さることには、なんのいらへをかせむ。なかなかならむ。殿上にていひのしりつるは。うへもきこしめして興ぜさせおはしましつ」と語る。頭の辨もろともにおなじことをかへすがへす誦じたまひて、いとをかしければ、人人みなとり

どりにものなどいひ明かして、歸るとても、なほおなじことをもろ聲に誦じて、左衛門の陣に入るまできこゆ。……………

晋の王徽之（字は子猷）が、竹を愛し、竹を指して、「何ぞ一日も此君なかるべけんや」といった故事を、清少納言がよく心得ていて、殿上人たちを驚かせた話である。

中宮が職の御曹司にいられた頃のことでありましょう。五月のある暗い晩に、殿上人が大勢來て、「女房はおられますか」という。清女が「もしもし、どなたですか。ひどくものものしく大きな声でおっしゃるの」と、とがめると、いきなり、ものも言わず、御簾を持ちあげて、がざりとさし入れる、くれ竹であつた。とつさに、「おやまあ『この君』でしたか」と清女が答えたので、意表に出られて、源中將をはじめ、六位の人々が殿上に引きかえした。あとに残つた頭の弁（藤原行成）が、「誰が教へを聞きて人のなべて知るべうもあらぬことをばいふぞ」と述べているところを見ると、清女がとつさに「おい、『この君』にこそ」と王子猷の故事を持ち出した当意即妙には、漢才をはこる殿上人たちも、当身をくらつた氣持であつたろう。相談の結果御名答も浮かばず、「晋の騎兵參軍王子猷は、種多て此の君と称す。唐の太子賓客白樂天は、愛でて我が友と為す。」と朗詠して大勢が集つて來たのを聞いた清女はさぞかしよい氣持であつたこととその得意のさまが眼に浮ぶようである。

(7) 二八二段

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして、集まりさぶらふに、宮「少納言よ、香爐峯の雪いかならむ」とおほせらるれば、御格子あげさせて、御簾を高くあげたれば、笑はせたまふ。

人人も、さることは知り、歌などにさへうたへど、思ひこそよらざりつれ。「なほ、この宮の人にはさべきなめり」といふ。

これも当時、人口に膾炙されていた白楽天の句、「遺愛寺鐘歇^ノ枕^ノ聴^キ、香爐峰雪撥^ハ簾看^ム」によつての中宮のおたずねであるが、早速御格子をあげさせ、進んで御簾を高くあげ、「撥簾看」を実演した気転が称揚されたのである。このように清女の漢才は随時随所に表わされて、人人に歎称されている。

以上の引例で明らかのように、清少納言は、当代の教養人、風流才子を以て任ずる齊信・行成・公任等を向うに廻わし、堂々と漢詩文に対する才能を発揮して、その名声を馳せている。そしてこれ等の記事が枕の草子を特色づけていることも確かである。

三、枕草子における引用漢文一覧表

註1. 枕草子の引用原文は、(三巻本) 日本古典全書 枕冊子 田中重太郎校註によつた。

2. 漢詩文の出典は漢籍・日本漢文・仏典等にわたっている。日本漢文と仏典とは(*) 印をつけた。

3. 表の配列は、枕草子の原文(主として引用漢文に係のある部分)の五十音図順に従つたが、その配列にはなお不備の点が多い。

原	文	出典
あ	白馬見にとて、里人は車清げに したてて見に行く。 (三 正月一日は)	次左、白馬、陣、 ^{近衛} 度、 ^{舍人} 也、次左右馬頭、 ^度 、次白馬七疋、次左右、 ^次 白馬七疋、次左右、 ^次 白馬七疋、次左右助、次右白馬陣、 ^度 畢。 (*) 江家次第 卷二 七日節會
	あけぐれのほどに歸るとて、「雪、 某の山に満てり」と誦じたるは、 (一七六 雪のいと高うはあら で)	曉入 ^ニ 梁王之苑。雪、 ^満 群山。一夜 登 ^リ 庾公之樓。月明 ^ニ 千里。 (*) 和漢朗詠集上卷 冬 雪。 (謝觀)

「朝にさる色」とかや、ふみにも
作りたなる。

(二三九 雲は)

……昔者先王嘗游^ニ高唐^ノ。怠而晝
寢。夢見^ニ一婦人^一。曰、妾巫山之
女也。爲^ニ高唐之客^一。聞君游^ニ高
唐^ノ、願薦^ニ枕席^一。王因幸^レ之。去
而辭曰、妾在^ニ巫山之陽^一。高丘之
岨。旦爲^ニ朝雲^一。暮爲^ニ行雨^一。朝朝
暮暮陽臺之下。旦朝視^ニ之^一。如言。
故爲^ニ立廟號曰朝雲^一。……(文選
第十九 高唐賦 宋玉)

清^①あるにしたがひ、定めず、
なにごとくもてなしたるをこそ
よきにすめれ」とうしろ見きこ
ゆれど、頭辨「わがもとの心の
本性」とのみのたまひて、改ま
らざるものは心なり」とのたま
へば、清「さて、『惴りなし』と
はなにをいふにか」とあやしが
れば、笑ひつ。(四七 職の御曹
司の西面の)

始^レ自^ニ衣冠^一及^ニ牛車馬^一。隨^レ有
用^レ之。勿^レ求^ニ美麗^一。不^レ量^ニ己
力^一。好^ニ美物^一、則必招^ニ嗜好之謗^一。
……

(*) 九條師輔公遺誠)

子曰、君子不^レ重則不^レ威。學則
不^レ固。主^ニ忠信^一。無^ニ友^一不^レ如^ニ己
者^一。過則勿^レ惴^レ改。 (論語 學
而第一)

「一乗の法なり」など人々も
笑ふことのすぢめなめり。
(九七 御かたがた……)

十方佛土中。唯有^ニ一乘法^一。無^レ
二亦無^ニ三^一。除^ニ佛方便說^一。但說^ニ
無上道^一。(法華經方便品)

一の舞の、いとうるはしう袖を
あはせて、
(一三七 なほめでたきこと)

主上召、藏人頭應^レ召如初儀。
被^ニ定^一仰^ニ一舞^一、奉^ニ仰吳竹臺下^一
仰^レ之。使立^ニ陪從上頭^一、舞人進
舞^ニ駿河舞^一。一舞^ニ二人先進^一、上臈者
出^ニ自^一露臺南四間^一下

<p>清『末だ、三十の期に及ばず』といふ詩を、さらにこと人に似ず誦し給ひし』などいへば、</p> <p>(一五七 宰相中將齊信…)</p>	<p>藏者出^レ自^レ第二間、拍子之後次舞人亦如^レ此。</p> <p>(※ 江家次第 第六 石清水臨時祭試樂)</p> <p>顔回周賢者。未^レ至^レ三十期。潘岳晉名士。早著^レ秋興詩。彼皆少^レ於我。可^レ喜始見遲。</p> <p>(※ 本朝文粹 第一 見二毛一源英明)</p>
<p>「斧の柄も朽ちぬべきなめり」</p> <p>(七〇 懸相人にて來たるは)</p> <p>「薪こることは昨日に盡きにしをいざ斧の柄はここに朽たさむ」とよみたまひたりけむこそいとめでたけれ。</p> <p>(二九〇 小原の殿の御母上とこそは)</p>	<p>晉時王質伐木至見^レ童子數人棊而歌。質因聽^レ之。童子以^レ一物與^レ質。如^レ棊核。質含^レ之不覺饑。俄頃童子謂曰、何不^レ去。質起視^レ斧柯盡爛。既歸無復時人。</p> <p>(述異記上)</p> <p>時有^レ仙人。來白^レ王曰、我有^レ大乘。名^レ妙法蓮華經。若不^レ違我。當^レ爲宣說。王聞^レ仙言。歡喜踊躍。即隨^レ仙人。供^レ給所須。採^レ果汲^レ水。拾^レ薪設^レ食。乃至以身而作^レ牀座。身心無^レ倦。</p> <p>(※ 法華經提婆品 第十二)</p>
<p>頭辨『女は己をよろこぶもののために顔づくりす。士は己を知る者のために死ぬ』となむいひたる』といひあはせたまひつつ、</p>	<p>豫讓遁^レ逃山中。曰、嗟乎士爲^レ知己者^レ死。女爲^レ說^レ己者^レ容。</p> <p>(史記 卷八六 刺客列傳第二 六 豫讓)</p>

<p>よう知りたまへり。</p> <p>(四七 職の御曹司の西面の…)</p> <p>(大藏卿ばかり耳とき人はなし。まことに、蚊の膝の落つるをも聞きつけたまひつべうこそありしか。</p> <p>(二五九 大藏卿ばかり)</p>	<p>江浦之間生^レ蟻。其名曰^レ焦螟。群飛而集^レ於蚊睫。弗^レ相觸^レ也。栖宿去來、蚊弗^レ覺也。離朱子羽、方^レ畫拭^レ眇。揚^レ眉而望^レ之。弗^レ見^レ其形。觴俞師曠方^レ夜聽^レ耳。俛首而聽^レ之、不^レ聞^レ其聲。唯黃帝與容成子、居^レ空桐之上、同齋三月。心死形廢。徐以^レ神視。塊然見^レ之。若^レ嵩山之阿。徐以^レ氣聽。砰然聞^レ之。若^レ雷霆之聲。</p> <p>(列子 湯問篇)</p>
<p>宰相の君の、「瓦に松はありや」といらへたるに、いみじうめでて、『西の方都門を去れることいくばくの地ぞ』と口ずさみつること」などかしがましきまでいひしこそをかしかりしか。</p> <p>(七九 かへる年の二十餘日)</p>	<p>高高驪山上有^レ宮。朱樓紫殿三四重。遲遲兮春日玉聲暖兮溫泉溢。嫋嫋兮秋風山蟬鳴兮宮樹紅。翠華不^レ來歲月久。墻有^レ衣兮瓦有^レ松。吾君在^レ位已五載。何不^レ幸乎其中。西去^レ都門幾多地。吾君不^レ遊有^レ深意。一人出兮不容易。六宮從兮百司備。八十一車千萬騎。朝有^レ宴飲暮有^レ賜。中人之產數百家。未^レ足充^レ君一日費。吾君修^レ己人不^レ知。不^レ自逸兮不自嬉。吾君愛^レ人人不^レ識。不^レ傷^レ財兮不^レ傷^レ力。驪宮高兮高入雲。君之來兮爲^レ一身。</p>

<p>君之不_レ來分爲_二千萬人_一。 <small>(白氏長慶集 卷四 諷諭四 麗宮高)</small></p> <p>觀_レ身岸、額、離_レ根草。論_レ命江頭不_レ繫舟。</p> <p><small>(※和漢朗詠集 卷下 雜羅維)</small></p>	<p>あやふ草は、岸の額に生ふらむも、げにたのもしからず。</p> <p><small>(六三 草は)</small></p>	<p>清「九品蓮臺の間には、下品といふとも」など、書きてまゐらせたれば、</p> <p><small>(九七 御かたがた)</small></p>	<p>宮「少納言よ、香爐峯の雪はいかならむ」とおほせらるれば、御格子あげさせて、御簾を高くあげたれば、笑はせたまふ。</p> <p><small>(二八二 雪のいと高う降りたるを)</small></p> <p>日高睡足猶捕_レ起。小閣重_レ裘不_レ怕_レ寒。遺愛寺鐘_レ欹_レ枕聽。香爐峰雪撥_レ簾看。匡廬便是逃_レ名地。司馬仍爲_二送_一老官。心泰身寧是歸處。故鄉何獨在_二長安_一。</p> <p><small>(白氏長慶集 卷十六 香爐峰下、新ト山居、草堂初成、偶題東壁)</small></p>	<p>大納言殿の、「聲、明王の眠をおどろかす」といふことを高ううち出だしたまへる、めでたうをかしきに、ただ人のねぶたかりつる目もいと大きになりぬ。</p> <p><small>(二九五 大納言殿まゐりたまひて)</small></p> <p>……雞人曉唱。聲、驚_二明王之眠_一。覺鐘夜鳴。響徹_二暗天之聽_一。</p> <p><small>(※本朝文粹 卷三 對冊 漏 尠 都良香。和漢朗詠集 卷下 雜 禁 中 都良香)</small></p> <p>晩、叢、白、露、夕。衰、葉、涼、風、朝。紅、艷</p>
--	---	---	--	--

<p>覽_二ずるとて_一と宰相の君の聲にていらへつるが、をかしうもおぼえつるかな。……」</p> <p><small>(一三八 殿などのおはしまさで後)</small></p> <p>久已歇。碧芳今亦銷。幽人坐相對。心事共蕭條。</p> <p><small>(白紙長慶集 卷九 感傷一 秋題牡丹叢)</small></p>	<p>五月ばかり、月もなういと暗きに、殿上人「女房やさぶらひたまふ」と聲聲していへば、宮「出でて見よ。例ならずいふはたれそとよ」とおほせらるれば、清「こは誰ぞ。いとおどろおどろしうきはやかなるは」といふ。ものはいはで、御簾をもたげてそよとさし入る、くれ竹なりけり。清「おい、『この君』にこそ」といひわたるを聞きて、「いざいざ、これまづ殿上に行きてかたらむ」とて、式部卿の宮の源中將、六位などもどりけるは往ぬ。……殿上人「種あてこの君と稱す」と誦じて、また集まり來たれば、……」</p> <p><small>(一三二 五月ばかり)</small></p> <p>嘗寄_二居空宅之中_一。便令_二種_レ竹。或問_二其故_一。微之但_レ嘯詠指_レ竹曰。何可_二一日無_二此_一君_一邪。</p> <p><small>(晉書 卷八〇 列傳五〇 王微之) 註 王微之字は子猷、羲之の子。世說新語 棲逸にもこの記事あり)</small></p> <p>……晉騎兵參軍王子猷_⑤。種而稱_二此君_一。唐太子賓客白樂天。愛爲_二我友_一。……</p> <p><small>(※本朝文粹 卷十一 冬夜守庚申。同賦修竹冬青。應_二教_一。藤原篤茂)</small></p> <p><small>(※和漢朗詠集 卷下 雜 竹にもこの句をのせ、序篤茂と記してある)</small></p> <p>舞人自_レ上退到_二竹臺東_一。次右袒進舞_二求子_一。</p> <p><small>(※江家次第 第六 石清水臨時祭試樂)</small></p>	<p>このたびは、やがて、竹のうしろより舞ひ出でたるさまどもはいみじうこそあれ。</p> <p><small>(一三七 なほめでたきこと)</small></p>
---	--	---

さう、ちうが家の人のもどかしさも忘れぬべし。

(三二 菩提という寺に)

五月、雨の聲をまなぶらむもあはれなり。

(三八 花の木ならぬは)

清「されど門のかぎりを高うつく人もありけるは」といへば、生昌「あなおそろし」とおどろきて、生昌「それは于定國がことにこそ侍るなれ。古き進士などに侍らずは、うけたまはり知るべきにも侍らざりけり。たまたまこの道にまかり入りにければ、かうだにわきまへ知られ侍

唐呂雲卿嘗寓君山側。遇一老人索酒數行。老人歌曰、「湘中老人讀黃老。手援紫藥坐碧草。春至不知湘水深。日暮忘却巴陵道。」

(枕草子評釋 金子元臣著ではこの文を列仙傳六にあると記してあるが、汲古閣本列仙傳上・下二卷にはこの記事見當らず。田中本・池田本共に未詳となす。三體詩卷一には、君山という題で「」の中の詩が、作者未詳のまゝ載せられている。)

長潭、五月、雨含氷氣。孤檜終宵學雨聲。

(方干「唐の詩人」の詩句。金子彦二郎氏説)

于定國字曼倩。東海鄆人也。其父于公爲縣獄吏郡決曹。決獄平。羅文法者于公所決皆不恨。郡中爲之生立祠。……始定國父于公其閭門壤。父老方共治之。于公謂曰、少高、大門閭。令容駟馬高蓋車。我治獄多陰德。未嘗有所冤。子孫必有與者。至定國爲丞相永

り」といふ。

(六 大進生昌が家に)

才の男召して、聲引きたる人長のこちよげさこそいみじけれ。

(一三七 なほめでたきこと)

(宣方「參ぜむとするを、今日の御物忌にてなむ。『三十の期におよばず』はいかが」といひたれば、返りごとに、清「その期は過ぎたまひにたらむ。朱買臣が妻を教へけむ年には、し」と書きてやりたりしを、またねたがりて、うへの御前にも奏しければ、……。

(一五七 宰相の中將齊信…)

清「詩をいとをかしう誦じ侍るものを。『蕭會稽の古廟を過ぎにし』などもたれかいひ侍らむ

爲御史大夫二封侯傳世云。

(前漢書 卷七一 列傳 第四 一 于定國)

次歌韓神之時。人長立舞。次勸盃。次人長進召才男。次人長申請可勤仕先張由復座。(*雲圖抄裏書 御神樂次第)

顏回周賢者。未至三十期云は、前掲いの部、(*本朝文粹 第一 見二毛一 源英明に同じ。)

朱買臣字翁子。吳人也。家貧好讀書不治產業。常艾薪樵。實以給食。擔束薪行且誦書。其妻亦負戴相隨。數止買臣毋歌嘔道中。買臣愈益疾歌。妻羞之求去。買臣笑曰。我五十當富貴。今已四十餘矣。女苦日久。待我富貴一報女功。妻悲怒曰。如公等終餓死溝中耳。何能富貴。買臣不能留。即聽去。……。

(前漢書 卷六四 列傳三四 朱買臣)

……蕭會稽之過古廟。託締異代之交。張僕射之重新才。推爲忘年之友。……。

<p>とする。しばしならさぶらへかし、くちをしきに」……</p> <p>(一五七 宰相の中將齊信…)</p> <p>(※ 本朝文粹 卷十 晚春陪上州大王臨水閣^④ 後江相公)</p> <p>註(1)蕭會稽——會稽郡の長吏蕭允</p> <p>(2)古廟——吳の季札の廟</p> <p>(3)後江相公は大江朝綱。</p>	<p>す</p> <p>(二月つごもりごろに風いたう吹きて空いみじう黒きに、雪すこしうち散りたるほど……)</p> <p>①、②、③、④、⑤、⑥、⑦、⑧、⑨、⑩、⑪、⑫、⑬、⑭、⑮、⑯、⑰、⑱、⑲、⑳、㉑、㉒、㉓、㉔、㉕、㉖、㉗、㉘、㉙、㉚、㉛、㉜、㉝、㉞、㉟、㊱、㊲、㊳、㊴、㊵、㊶、㊷、㊸、㊹、㊺、㊻、㊼、㊽、㊾、㊿、</p> <p>とあるは、げにけふのけしきにいとようあひたる、これがもといいかでかつくべからむと思ひわづらひぬ。……</p> <p>清「空寒み花にまがへて散る雪に、」</p> <p>と、わななくわななく書きてとらせて、……</p> <p>(一〇二 二月のつごもりごろに)</p> <p>誦經のものうち置きて、堂童子など呼ぶ聲、……</p> <p>(一一六 正月に寺にこもりたるは)</p> <p>往歲會爲西畧吏。慣從駱口一到南秦。三時雲冷多飛雪。二月山寒少有春。我思舊事猶惆悵。君作初行定苦辛。仍賴愁猿寒不叫。若聞猿叫更愁人。</p> <p>(白氏長慶集 卷十四 律詩 南秦雪)</p>	<p>せ</p> <p>清涼殿の御前に、掃部づかさの、疊をしきて、使は北むきに、舞人は御前のかたにむきて、これらはひがおぼえにもあらむ。</p> <p>下清涼殿東庇御簾。孫廂南第三間供御座。東向敷二色綾毯代。其上立殿上御椅子。御座南間以南簀子敷并長橋敷。菅圓座爲</p>
--	--	---

<p>……………。</p> <p>(一三七 なほめでたきこと)</p> <p>公卿座。簀子納言座〔北上西面〕其長橋上第一圓座差退。東敷之。長橋南北二行敷。黃端帖。爲殿上人座。北面。押二年中行事障子。若后宮内親王參上給時。押昆明池障子。以御揉鞋置御膳棚。舞人陪從參集樂所。公卿候殿上。藏人度々奏見參。藏人奉仰令出納召。舞人陪從參集瀧口戸下。</p> <p>(※ 江家次第 第六 石清水臨時祭試樂)</p>	<p>そ</p> <p>清涼殿の丑寅の隅の、北の隔なる御障子は、荒海の繪、生きたるものどものおそろしげなる、手長足長などをぞかきたる、上の御局の戸をおしあけたれば、つねに目に見ゆるを、にくみなとして笑ふ。</p> <p>(二二 清涼殿の丑寅の隅の)</p> <p>弘廂……北有荒海障子。南方手長。北面障子宇治網代墨繪也。</p> <p>(※ 禁秘抄)</p> <p>長臂國在其東。捕魚水中。兩手各操一魚。</p> <p>(山海經 卷六)</p> <p>長股之國在雄常北。被髮一曰長脚。西方孽收左耳。有蛇乘兩龍。</p> <p>(山海經 卷七)</p>	<p>寮官居聰明。以折敷。坏等羞公卿。</p> <p>註 聰明者酢也。餅白黑。梁飯。栗黃。乾棗也。</p> <p>(※ 江家次第 卷五 釋奠)</p>
---	---	---

<p>た</p> <p>竹の色のもとにあゆみ出でて、御琴うちたるほど、ただいかにせむと、おぼゆるや。</p> <p>(一三七 なほめでたきこと)</p> <p>陪從等發_二物聲_一。藏人所雜色_二人昇_一御琴漸進出、到_二吳竹臺_一下。以下、い一の舞の……の引用、江家次第の文につづく。</p> <p>(※ 江家次第 第六 石清水臨時祭試樂)</p>	<p>清「ただ秋の月の心を見侍るなり」と申せば、……。</p> <p>(九六 職におはしますころ)</p> <p>……曲終収_レ撥當_レ心畫。四絃一聲如_レ裂帛。東船西舫悄無_レ言。唯見江心秋月白。……</p> <p>(白氏長慶集 卷十二 感傷四琵琶引)</p> <p>枝繁_二金鈴_一春雨後。花薰_二紫驛_一風程。</p> <p>(※ 和漢朗詠集 卷上 夏花橋 後中書王)</p> <p>註 颯は凱なり。後中書王は村上天皇の皇子具平親王。</p>	<p>(三五 木の花は)</p> <p>(賀茂の奥に、なにさきとかや、たなばたの渡る橋にはあらで、)</p> <p>(九五 五月の御精進のほど)</p> <p>烏鵲填_レ河成_レ橋、而度_二織女_一。(白孔六帖)</p>	<p>つ</p> <p>(頭の中將齊信の君の)「月、秋と期して身いづくか」といふことをうち出だし給へりし、はたい</p> <p>……彼「金谷醉_レ花之地。花毎_レ春句而主不_レ歸。南樓翫_レ月之人。月與_レ秋期而身何去。況</p>
---	--	--	---

<p>みじうめでたし。</p> <p>(一三〇 故殿の御ために)</p> <p>龍深者思又深。」……</p> <p>(※ 本朝文粹 卷十四 爲_二謙徳公_一修_二報恩善願文_一 菅三品)</p> <p>「」の中は、(※ 和漢朗詠集 卷下 雜 懷舊 菅三品)として載せてある。註 菅三品は道眞の孫、菅原文時。</p>	<p>つとめて、藏人所の紙屋紙ひき重ねて頭辨「今日はこのこりおほかるこちなむする。夜をとほして昔物語もきこえ明かさむとせしを、鶏の聲にもよほされてなむ」といみじう言おほく書きたまへる、いとめでたし。御返に、清「いと夜深く侍りける鳥の聲は、孟嘗君のにや」ときこえたれば、たちかへり、「孟嘗君の鶏は函谷の關を開きて、三千の客わづかに去れり」とあれども、これは逢坂の關なり」とあれば、清「夜をこめて鳥のそら音ははかるとも世にあふ坂の關はゆるさじ 心かしこき關守侍り」ときこゆ。また、たちかへり、</p> <p>頭_②逢坂は人越えやすき關なれば、鳥鳴かぬにもあけて待つとか」</p> <p>孟嘗君得_レ出。即馳去。更封傳_二變名姓_一以出_レ關。夜半至_二函谷關_一。秦昭王後悔_レ出_二孟嘗君_一求_レ之已去。即使_二人馳_一傳逐_レ之。孟嘗君至_レ關。關法雞鳴而出_レ客。孟嘗君恐_レ追至_二客之居_一下坐_レ者。有_レ能爲_二雞鳴_一。而雞盡鳴。遂發_レ傳出。出如_二食頃_一秦追果至_レ關。已後。孟嘗君出乃還。</p> <p>(史記 卷七五 孟嘗君列傳一五)</p>	<p>唯相坂是古昔之舊關也。時屬_二聖運_一。不_レ閉_二門鍵_一。出入無_レ禁。年代久矣。</p>
---	---	--

<p>とありし文どもを、はじめのは僧都の君いみじう額をさへ突きで、とりたまひき。後後のは御前に。……………</p> <p>(一三一 頭の辨の) 女房「しばしや。『など、さ夜を捨てていそぎたまふ』とあり。」 (七三 まいて、臨時の祭の調樂などは)</p>	<p>「露は、別れの涙なるべし」といふことを頭の中將のうち出だしたまへれば、 (一五七 宰相中將齊信……………)</p>	<p>鶴は、いとちたきさまなれど、鳴く聲雲居まできこゆる、いとめでたし。 (三九 鳥は)</p>	<p>殿上より梅の花のみなちりたる枝を「これいか」といひたるに、ただ、清「早く落ちにけり」といらへたれば、その詩を誦じて殿上人黒戸にいとほくめたる、……………</p>
<p>(※ 文德實錄 卷第九 天安元年四月)</p>	<p>年不_レ再秋_二夜五更。料知靈配曉來情。露應_レ別淚_二珠空落。雲是殘粧_レ髻未_レ成。恐_レ結_二橋思_レ傷_二鵲翅_一。嫌_レ催_二駕欲_レ臨_二鷄聲_一。相逢相失間分寸。三十六句一水程。 (※ 菅家文草 七月七日代_二牛女_一惜_二曉更_一。各分_二一字_一。應_レ制。)</p>	<p>鶴鳴_二九皋_一。聲聞_二于天_一。 (詩經 小雅 鴻雁之什 鶴鳴)</p>	<p>大庾嶺之梅早落。誰問_二粉粧_一。匡廬山之杏未開。豈趁_二紅艷_一。 (※ 和漢朗詠集 卷上 春 柳 内宴停_二盃看_二柳色_一序 紀長谷雄) 備考 作者は、行成本では江</p>

<p>(一〇一 殿上より、梅のみな) 遠_レくて近_レきもの。極樂。舟の道。人のなか。 (一六二 遠くて近きもの)</p>	<p>清_二な_一かば隠_二したり_一けむ、えかくはあらざりけむかし。あれはただびとにこそはありけめ」といふを、…………… (九〇 上の御局の御簾の前にて)</p>	<p>「なにがし_二聲_一の秋」と誦_レじてまゐる音すれば…………… (七四 職の御曹司におはしますころ)</p>	<p>七日、雪間の若菜つみ。青やかにて、例はさしもさるもの、目近からぬ所にもてさわぎたるこそをかしけれ。 (三 正月一日は)</p>
<p>納言となつてゐる。これに従えば、大江維時となる。 從_レ是西方過_二十萬億土_一。有_二世界_一。名曰_二極樂_一。其上有_二佛號_二阿彌陀_一。 (※ 阿彌陀經) 阿彌陀佛去_レ此不_レ遠。 (※ 觀無量壽經)</p>	<p>……………移_レ船相近邊相見。添_レ酒回_二燈重開_一宴。千呼萬喚始出來。猶抱_二琵琶_一半遮_二面_一。…………… (白氏長慶集 卷十二 感傷四琵琶引)</p>	<p>池冷水無_二三伏夏_一。松高風有_二一聲秋_一。 (※ 和漢朗詠集 卷上 夏 納涼 夏日閑避暑 源英明)</p>	<p>正月七日爲_二人日_一。以_二七種菜_一爲_二羹_一。 (荊楚歲時記) 正月七日。俗以_二七種菜_一作_二羹食_一之。人無_二萬病_一也。 (※ 拾芥抄 上 歲事部第二)</p>

<p>(一三七)なほめでたきこと</p> <p>勤^レ之。</p> <p>(※雲圖抄 三月 還立御神樂)</p>	<p>(清「明日はいかなることをか」といふに、いささか思ひまはし、とどこほりもなく、) 齊信「『人間四月』をこそは」といらへたまへるがいみじうをかしきこそ。</p> <p>(一五七 宰相中將齊信……)</p> <p>たふときこと 九條の錫杖。念佛の回向。</p> <p>(二六三 たふときこと)</p> <p>拜し舞踏しさわぐよ。</p> <p>(九 よろこび奏するこそ)</p> <p>蠅こそ、人の名につきたる、いとうとまし。</p> <p>(四一 蟲は)</p> <p>……宮^①「花の心開けざるや。いかに、いかに」とのたまはせられたば、清「秋はいまだしく侍れど、夜に九度のぼるこちなむい侍る」ときこえさせつ。……</p>	<p>人間四月芳菲盡。山寺桃花始盛開。長恨春歸無處。不知轉入此中來。</p> <p>(白山長慶集 卷一六 律詩 大林寺桃花)</p> <p>光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨。</p> <p>(※佛說觀無量壽經)</p> <p>再拜置^レ笏。立、左右左。居、左右左。取^レ笏立再拜。</p> <p>(※拾芥抄 中 儀式曆部第十五 舞踏事)</p> <p>甘蠅古之善射者。殺弓而默伏鳥下。</p> <p>(列子湯問篇)</p> <p>蠅伊呂泥・蠅伊呂杼</p> <p>(※古事記 安寧天皇)</p> <p>九月西風興。月冷霜華凝。思君秋夜長。一夜魂九升。二月東風來。草析花心開。思君春日遲。一日陽九廻。妾住洛橋北。君住洛橋南。十五即相識。今年</p>	<p>(二六二 關白殿……)</p> <p>琵琶ひきやみたるほどに、大納言殿、「琵琶、聲やんで物語せむとすること遅し」と誦じたまへりしに、……</p> <p>(七七 御佛名のまたの日)</p> <p>唐土に敵どちなどして舞ひけむなど聞くに。</p> <p>(二〇五 舞は)</p> <p>山鳥、友を戀ひて、鏡を見すればなくさむらむ、心わかういとあはれなり。</p> <p>(三九 鳥は)</p> <p>……忽聞水上琵琶聲。主人忘歸客不發。尋聲聞問彈者誰。琵琶聲停欲語遲。</p> <p>(白氏長慶集 卷十二 感傷四琵琶引)</p> <p>項莊拔劍起舞。項伯亦拔劍起舞。常以身翼蔽沛公。莊不得擊。</p> <p>(史記 項羽本紀)</p> <p>昔劇賓王結賈峻卯之山。獲一鸞鳥。王甚愛之。欲其鳴而不致。乃飾以金樊。鑿以珍羞。對之逾戚。三年不鳴。其夫人曰。嘗聞鳥見其類而後鳴。何不懸鏡映之。王從其意。鸞覩形悲鳴。哀音響中宵。一奮而絕。</p> <p>(事文類聚後集)</p> <p>(※袖中抄 ※興義抄五 ※無名抄などにもこの話あり)</p>
--	---	---	---

………權中納言の、「や、や、ま
かりぬるもよし」とて、うち笑
みたまへるぞめでたき。………
(三三) 小白河というところは)

爾時世尊告舍利弗。汝已慍懃
三請。豈得_レ不_レ說。汝今諦聽。
善思_二念之_一。吾當_二爲_レ汝分別解
說。說_二此語_一時。會中有比丘。
比丘尼。優婆塞。優婆夷五千人
等。即從_レ坐起。禮_レ佛而退。所
以者何。此輩罪根深重。及增上
慢。未_レ得_レ謂_レ得。未_レ證_レ謂_レ證。
有_二如是失_一。是以不_レ住。世尊
默然而不_レ制止。爾時佛告舍利
弗。我今此衆。無_二復枝葉_一。純
有_二眞實_一。舍利弗如_レ是增上慢人。
退亦佳矣。汝今善聽。當_二爲_レ汝
說。

(※ 法華經 方便品)

「遊子なほ残りの月に行く」と
いふ詩を、聲よく誦じたるをも
かし。

佳人盡飾_二於晨粧_一。魏宮鐘動。遊
子猶行_二於殘月_一。函谷雞鳴。
(※ 和漢朗詠集 下卷 雜 曉
賦 賈島—賈島の誤ならんと
いう—倭漢朗詠集考證)

(一八七 大略近なるところに
て聞けば)
「遊子なほ残りの月に行く」と
誦じたまへる、またいみじうめ
でたし。

(二九五 大納言まゐりたま
いて)

「雪月花の時」と奏したりける
をこそ、いみじうめでさせたま

五歳優游同過_二日_一。一朝消散侶
浮雲。琴詩酒伴皆拋_レ我。雪月

ひけれ。

(一七七 村上の前帝の御時に)

楊貴妃の、帝の、御使にあひて
泣きけるかほに似せて、「梨花
一枝、春、雨を帯びたり」など
いひたるは、おぼろげならじと
思ふに、なほいみじうめでたき
ことはたぐひあらじとおぼえた
り。

(三五 木の花は)

① 蘭省花時錦帳下
と書きて、「末はいかに、末は
いかに」とあるを、いかにかは
すべからむ、………その奥
に炭櫃に消え炭のあるして、
② 草の庵をたれかたづねむ
と書きつけて取らせつれど、ま
た返りごともしはず。
(七八 頭の中將のすずろなる
そら言を聞きて)

り
「凜凜として氷鋪けり」といふ
ことを返す返す誦じておはする
は、いみじうをかしうて、夜一

花時、最憶_レ君。幾度聽_レ雞歌。白
日。亦曾騎_レ馬詠_二紅裙_一。吳姬暮
雨肅肅曲。自別_二江南_一更不_レ聞。
(白氏長慶集 卷二五 律詩
寄殷協律)

………玉容寂寞淚闌干。梨花
一枝春帶_レ雨。………
(白氏長慶集 卷十二 感傷四
長恨歌)

丹霄拂_二手三君子_一。白髮垂_二頭一
病翁_一。③ 蘭省花時錦帳下。廬山雨
夜草庵中。終身膠漆心應_レ在。
半路雲泥亦不_レ同。唯有_二無生三
昧觀_一。榮枯一照兩成_レ空。
(白氏長慶集 卷十七 律詩
廬山草堂雨夜獨宿寄_二牛二李
七庾三十二員外_一)

秦甸之一千餘里。凜凜、氷鋪。漢
家之三十六宮。澄澄粉飾。
(※ 和漢朗詠集 卷上 秋 八

夜もあらかまほしきに、行くと
ころの近うなるもくちをし。
(二八五 十二月二十四日、宮
の御佛名の)

わ
宮「別れ」は知りたり
や」となむおほせらるるもいと
をかし。
(九〇 上の御局の御簾の前に
て)
醉不_レ成_レ歡_レ慘_レ將_レ別。
別時茫茫江浸_レ月。忽聞水上琵琶聲。主人忘_レ歸客不_レ發。……
(白氏長慶集 卷十二 感傷四
琵琶引)

四、引用漢詩文の書名分類と頻度数

つぎに枕草子における引用漢詩文の属する書名とその引用頻度数を示すと左ようになる。ただし、

- (1) 書名不明の分は人名で示した
- (2) 頻度数の計算は、たとえば、琵琶行の引用が異った場所に三回あった場合、それが同じ句であれば白氏文集1とし、異った句であれば白氏文集3とした。
- (3) 和漢朗詠集、本朝文粹、三体詩等のように枕草子著述後に編纂された書物でも、その内容が枕草子著作以前の作品である場合には、便宜上これを引用書名として掲げた。

- | | | |
|---|--------|-----|
| 1 | 白氏長慶集 | 13回 |
| 2 | *和漢朗詠集 | 8回 |
| 4 | *本朝文粹 | 6回 |
| 4 | *江家次第 | 6回 |
| 6 | 史記 | 3回 |
| 6 | *法華經 | 3回 |

- | | | |
|----|----------|----|
| 11 | 前漢書 | 2回 |
| 11 | 列子 | 2回 |
| 11 | 山海經 | 2回 |
| 11 | *拾芥抄 | 2回 |
| 11 | *觀無量壽經 | 2回 |
| 30 | 各一回づつのもの | |
- 文選・論語・詩經・晉書・述異記・白孔六帖・荊楚歲時記・事文類聚後集・三体詩・方干詩・*古事記・*文德実録・*雲図抄・*雲図抄裏書・*九条師輔公遺誠・*法成寺金堂供養記・*禁秘抄・*菅家文章・*阿弥陀經
- 以上のように引用書物は三十種に及び、引用漢詩文の頻度数は六十八回に及んでいる。引用書物は中国のもの十五種、日本漢文・仏典十五種となっている。
- これによって、枕草子と漢詩文との関係の深いことは認められると思ふ。(終り)

(昭和三十二年五月十一日記)

前会長を送る

内野熊一郎

時に興り、時に生き、時を処して、時に退き、止足悠遊の境に己を持する。正に前会長中西教授の人間像である。

実をいへば、そしてまた時が容認されるなら、まだまだ、いろんな点や事がらを、処理して、片づけていて貰ひたかったことが、山ほどある。それだけに、慥慥として郊野白霧の中に悠適されようとする脚は、ひっぱって、釘づけにもしておかまほしいことだった。

といって、才腕乱麻を断つのもなく、時流俗臭を叱咤するのでもない。碩学一世を掩ふのでもなければ、立德天下に並びたいといふのでもない。平常の裡に、常人をなづけ、若い人材を地道に仕立てていった、最も親しみやすく、近づきやすい人柄といへよう。蓋し時の任なる孔丘なる徒か。

重厚真摯。円熟な話し方には、人を庄する妖気さへ漂って、私には苦が手であつた。が、かういふ時には、見違へるほどの図太さがありながら、それでゐて、別にこれといふ話に無理は感じないのである。それで一層困るのである。やはり、このあたりが、人柄のどくといふものであらう。

戦争中、一粒種の令息が軍務に仆れられたこと。これのみは、どんなにか、消え難い憂ひの影となつてゐられることか。我等同窓すべてのものは、心をより合せて、深い黙禱を捧げる者である。しかし、この話に触れられる瞬間の先生の横顔ほど、人間的に深い美しさを感じさせるものはない。憂ひと寂しさとの愛と諦観とに鍛へぬかれ、耐へぬかれた人間「中西」の次元高い塑像である。理窟でなく、学識でもなく、道徳だけでもなく、ただ人間味である。狭ければ狭く、広ければ広く、衆寡それぞれに、一筋の人間味によって生き、存立する。かうした我々の至上命令を、人間「中西」がささやいてゐるやうに思はれる。

我々は、心を新にして黙語を聴き、そして前会長中西教授の長い心労に奉謝すると共に、その日々好日を祈念してやまぬ者である。

中西清先生略歴

明治二十八年八月十八日	三重県に生る
大正四年三月	三重県師範学校本科一部卒業
同 四年四月	三重県羽津尋常高等小学校訓導
同 五年八月	三重県津市修成尋常高等小学校訓導
同 八年四月	東京高等師範学校文科第二部入学
同 十二年三月	同 卒業
同 年四月	東京高等師範学校助教教授兼同訓導に任ぜらる
同 十四年三月	東京高等師範学校助教教授に任ぜらる
昭和三年三月	同教授に任ぜらる
同 十八年五月	同教授に任ぜらる
同 二十一年五月	同代議員・漢文学科主任を命ぜらる
同 二十三年七月	同幹事長に任ぜらる
同 年八月	東京教育大学設立委員会委員を命ぜらる
同 二十四年八月	東京教育大学教授・同評議員に任ぜらる
同 二十七年六月	同協議員に任ぜらる
同 二十九年七月	同附属図書館長に任ぜらる
同 三十一年三月	停年退職